

東京文化財研究所編：文化財害虫事典 B5変形4色カラー印刷，232 pp. ¥5,000 (税別)，((株)クバプロ (Tel. 03-3238-1689) 2001年12月刊)

2001年1月には杉山真紀子氏による「博物館の害虫防除ハンドブック」(雄山閣)が上刷され，本誌23巻1号(2001)に紹介しておいたが，IPMの概念が先行して実用書としての価値はもう一つと思われたが，本書は多色刷りで図も多く，市販の文化財害虫書としては当分バイブル的役割を果たすものと思われるので少々詳しく紹介しておく。

まず著者は，東京文化財研究所関係の方4名で，保存科学部長の三浦定俊氏，保存科学部主任研究官木川りか氏，同生物科学研究室長佐野千絵氏，同調査員・本学会常任理事山野勝次氏で，序論，各論，総論の3部と共に参考文献，学名・和名・薬剤と防除法の索引もあり大変便利である。序論では文化財の主要害虫とその特徴が，対象文化財の材質別，すなわち植物質・動物質とに分けられ，それぞれが木材・竹・紙・綿・畳あるいは羊皮紙・毛皮・毛織物・絹というように，それらの害虫と被害や生活史などがカラー写真や図で示されている。

各論は害虫が分類順に解説されていて，重要なものは見開き2頁に，それ程でないものは1頁に和名，学名，英名，目と科名，分布，大きさ，加害対象物，形態的特徴，生態，加害の特徴，加害するステージ，予防と管理上の注意，駆除法などが記載されており，重要な種には加害状況のカラー写真が示されている。その上近似種の簡単な図と説明もあり，それぞれに重要度を3段階で示し，虫の用語や薬剤など初心者には分かりにくいと思われる術語については，下段にその解説のある頁を参照頁として示してある。さらに総論で述べられた加害対象，その被害別と虫の加害時期などでも引けるように各頁の縁に索引が付いている。例えばオオナガシクイを引いてみると，加害対象が木材で被害は食害によるもので成虫幼虫が加害することが一目瞭然に分かるようになっている。反対に木材に被害がある虫が分からない場合は，木材の部分から初めから順次引いてみるこ

で加害虫の推定もできる。またコラムには害虫防除に関する基礎知識の解説があり，理解の助けになっている。

次に取り上げられている虫を目別に挙げられている種数を示す。シミ目1科4種，ゴキブリ目2科6種，シロアリ目2科4種，バッタ目1科1種，チャタテムシ目2科5種，コウチュウ目13科58種，ハチ目11科31種，ハエ目7科17種，チョウ目4科9種，合計9目43科135種である。総論は2章からなり，第1章は「文化財の生物被害防止のための日常管理」と題し，基本的考え方，有害生物について，総合的有害生物管理(IPM, Integrated Pest Management)の3部で，薬剤使用による殺虫・殺菌をいかにして減らすかを中心に解説している。第2章は「臭化メチル燻蒸代替法をめぐる文化財の加害生物防除法について」と題し5部に分けられていて，まず今後の防除法では，文化財の虫菌害防除は今まで燻蒸一辺倒であったが，今後は燻蒸を主に考えるのではなく，燻蒸は防除処理の単なる一手段と考えることが基本であるという発想がスタートとなり，とくに第3節の防除法の選択では，まず内部に生息する虫に対し，無薬剤法として，低酸素濃度処理，二酸化炭素処理，低温処理はかなり詳しく，他に高温・マイクロ波・放射線処理法が紹介されている。

薬剤使用法としては，燻蒸剤，蒸散剤が紹介されている。外部に生息する虫については，無薬剤法としては高温処理が紹介されているだけで，化学的防除法としては，忌避剤，施設処理剤が述べられている。ついでカビの処理法として，殺菌燻蒸剤，殺菌剤，防カビ処理剤の説明がある。第4節には従来の臭化メチル用の施設がどこまで利用できるかについてのアドバイスと今後造られる施設についての設計に当たっての注意が書かれている。終節のまとめとして将来これらの知識と技術を持つ専門家の需要が増えるであろうと結んでいるが，その養成については触れられていない。最後に簡単な手ほどきだけでも害虫調査法があればと思われたが，無理なのだろうか。なお，本書の紹介は“だより”18号にもあるが，家屋害虫書としても大いに役立つと思われるので，敢えて取り

上げた。

(奥谷禎一)

安富和男：虫たちの生き残り戦略 B6, 190 頁,
¥700 (中公新書 1641, 2002 年 5 月刊)

著者は本学会常任理事, 日本衛生動物学会・日本昆虫学会名誉会員で, 著書も多く存じの方も多
いと思う。

本書は家屋害虫とは直接の関係は薄いですが, 2, 3
の家屋害虫が取り上げられているので, その部分
を紹介しておく。虫の生活で興味を引く行動を4
章に分け解説されている。第1章は“あの手この
手の生き残り戦略”と題し, 8編の内次の3編が
関係がある。「慶雲」と言われている巨大な蚊柱を
つくるオオユスリカの話があり, 次に有機燐剤や
ピレスロイト剤抵抗性の鶏舎のイエバエ退治に導
入された昆虫成長抑制剤のシロマジンが, 意外に
もイエバエ幼虫の捕食性天敵として働くガイマイ
ゴミムシダマシの強壮薬として働く事がわかった
ことが語られ, 貯穀害虫であるノシメマダラメイ
ガやカシノシマメイガ幼虫の天敵であるシマメイ
ガコマユバチは, 産卵に際し以前に産卵されてい
たライバルの卵を殺してから自己の卵を産むとい
う習性のあることを述べている。

第2章は“愛のことは愛のかたち”と題し光・
振動・音波・化学物質などが7編あるが, 本書で
は, わが学会と関係あるのはチャバネゴキブリの
交尾行動が彼等の出す分泌物であることとチャ
タテムシとシバンムシの発音とがある。第3章は
“虫と植物は持ちつ持たれつ”と題し, ヤマトシロ
アリの巣から発見された菌核が防腐剤としての働
きがあることクマバチが花筒からの盗蜜をする
が, パッションフルーツでは受粉に大きな役割を

していることが語られている。第4章では“奇妙
な行動の秘密”と題し6編あり, ニホンミツバチ
の雄までがキンリョウヘンというランに騙されて
花粉を運ばせられることや, ミカンコミバエが強
く誘引されるメチルオイゲノールがシソ科やマメ
科に含まれていて, これはスズメなどの捕食者に
対し忌避作用があり一方では雄を強く誘引する物
質であることが述べられている。全体を通して読
んでみると今日レスケミカルとかIPMとか叫ば
れている時代に大きなヒントを与えてくれる一冊
である。
(奥谷禎一)

杉浦・伊藤・前田共編：ハチとアリの自然史
[本能の進化学] B5, 318 頁, ¥3,000 (北海道大
学図書刊行会, 2002 年 3 月刊)

蜂や蟻の若手研究者 18 名が色々な角度から彼
等の生活形態の解説がかかっている。家屋害虫と
しての観点からはほとんど縁がないが, 関連のあ
りそうな章を紹介しておく。第6章の松浦 誠氏
による「アシナガバチ・スズメバチの分業にみら
れる社会性」ではスズメバチ類にはみられない
が, アシナガバチ類では働き蜂による産卵が起こ
ることが知られていることが記されていることは,
彼等の駆除の際知っていてよいと思われる。第12
章の市野隆雄氏による「アリと植物」ではよく知
られたアリとアブラムシの関係すなわち防衛共
生以外に, 新芽や花芽から蜜を分泌してアリに
与えるという相利関係があることは, 屋内害虫
防除の折に顧客から聞かれることもあるので心得
ておく必要がある問題である。特にハチ・アリに
興味のある方には一読をお勧めする。(奥谷禎一)